懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・若手職員研修会開催
・複線人生のすゝめ
・滋賀県再犯防止担当者会議
・重層物語スィートメモリーズ

私を生かして地域を活かす

若手職員研修会開催

地域共生社会づくりを自分の業務と重ねながら、何ができるかを考え、アクションが起こせる市役所と社会福祉協議会の若手人材の育成を目的に、7月8日、9日にあいこうか市民ホール展示室にて研修会を開催しました。

講師として、やさしいまちづくり総合研究所より中西大輔さん、前神有里さんをお招きし、基礎編、応用編と、2日間に渡り行いました。

講師からは「発想の転換と価値観のアップデートの意識が大切」「若者の視点で、雑談しながら時には弱さや痛み悩みを分かち合い、職員間の化学反応を起こし、みんなでやっていこう！」とのエールが送られました。

参加者からは「役割分担からではなくやってみることから始める」「課題解決志向ではなく、市民と地域づくりのフラットな関係作り」「権限は連携するために使うもの」「対話によって視点を転換、拡大」「競争する関係性ではなく応援する関係性が大切」など、印象的だったキーワードが聞かれました。

このような若手職員の思いが活かされるように、共創（ともに新しい価値をつくっていくこと）が起きやすく、挑戦しやすい市役所づくりに努めていきましょう。

基礎編（やれそうなこと・やってみたいこと）

- AかBかの二分法ではなく、Cもあるといった三分法的な考え方
- 朝の数分の雑談の実践（雑談のなかの福祉を見出す）
- 他課が何をやっているかの理解　・知識を増やす
- 先入観にとらわれず動く　・自分のウェルビーイングを考える
- 自身の好き嫌いを書き出し自分の開示、自分の持ち味を知る
- 寛容さと多様性を持って地域に関わる　・人とつながる
- 計画的偶発性（予期せぬ偶然の出来事に柔軟に対応できることがキャリアアップにつながる）を意識する　・現場での実践（現状と役所の理想の乖離を知る）
- 自分の趣味、特技を職場内に活かしていく
- 前向き、プラス思考で一歩進みたい
- 自分に嘘をつかずにこれからの人生を考える

7月8日 67名

雑談大事

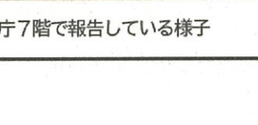
ゆるふわで

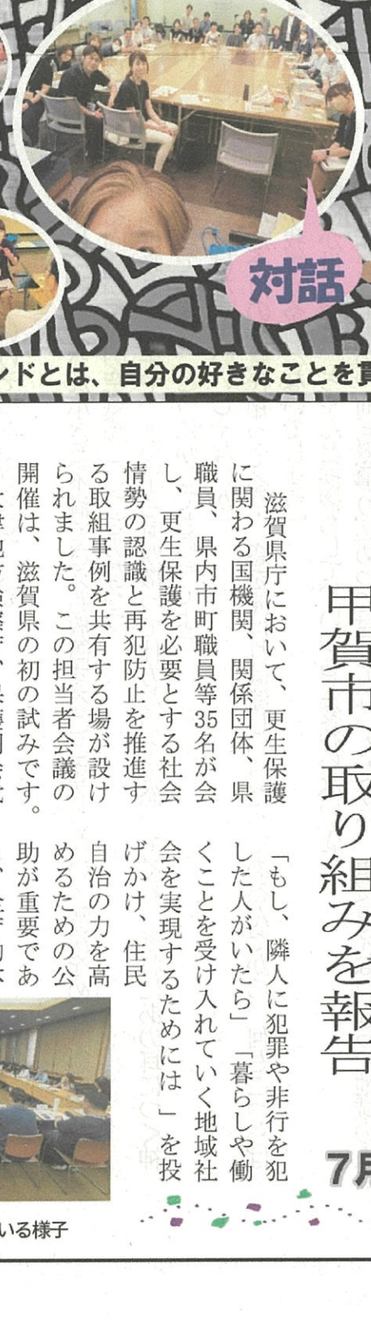
受講者の声を集めました！

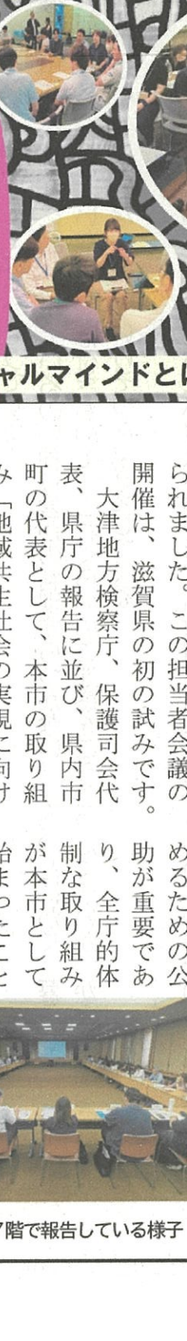
応用編（市役所力を強化するには）

- なんでも話し、相談できる関係をつくり、相談したら結果を報告する
- 課を越えてつながりあうこと、連携すること
- 市民の視点で市役所をみる・対話をして視点を広げる（市民とも対話）
- できることにとらわれず、したいこと、なりたいことを共有する
- 排除しない関係性　・多様な人材を認める機会や場つくり
- 割り算の仕事ではなく、足し算掛け算の仕事
- 市役所だけではできないことを理解する
- 個人のもつ特技、趣味を共有し活かす

7月9日 29名







ギャルマインドで対話

アラソワナイ
タタカワナイ
キソワナイ

ギャルマインドとは、自分の好きなことを貫くポジティブな考え方、Z世代若者用語

滋賀県再犯防止担当者会議

甲賀市の取り組みを報告

7月16日

滋賀県庁において、更生保護に関わる国機関、関係団体、県職員、県内市町職員等35名が会し、更生保護を必要とする社会情勢の認識と再犯防止を推進する取組事例を共有する場が設けられました。この担当者会議の開催は、滋賀県の初の試みです。

大津地方検察庁、保護司会代表、県庁の報告に並び、県内市町の代表として、本市の取り組み「地域共生社会の実現に向けた地域づくり」と題し、を中井浩喜係長が報告を行いました。

「もし、隣人に犯罪や非行を犯した人がいたら」「暮らしや働くことを受け入れていく地域社会を実現するためには」を投げかけ、住民自治の力を高めるための公助が重要であり、全庁的体制な取り組みが本市として始まったことを報告しました。

県庁7階で報告している様子

複線人生のすゝめ

1番、キャッチャー、武孝　国スポ・障スポ推進室

武孝（ぶこう） 直子さん

周りから多趣味だって言われる。単純に興味が向く先が多いだけか、飽き性なだけだと思う。そんな私が一番長くやり続けているのが、ソフトボール。

スポーツが大好きな家庭に生まれて、高校からソフトボールを始めた。振り返ってみると、ソフトボールとの向き合い方は、人生そのものみたいに多彩に変化してきた。

父をまねてボールを投げていた頃、スピードに磨きをかけ勝負にこだわった青春、大学の先輩にしごかれてボールに触れなかった時期、再会した仲間たちとチームを結成して全国大会で準優勝を勝ち取った瞬間。

最近では、自分のファインプレーより、仲間のファインプレーの方がずっと嬉しい。チームワークが大切なのは、ソフトボールも仕事も一緒。

私はヒットを打って、チームに動きをつけたい。ピンチの時は、みんなのほうを向いて声を出す。

「競うより分かち合う」それが今の向き合い方かもしれません。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ

休日の午前十時。

団地内にクラクションが鳴り響き、半年ぶりに帰ってきた無言の家主を乗せて、静かに霊柩車が出発した。

昨日の朝、病院で亡くなったのは隣に住む七〇代の女性だ。特に親密な間柄ではなく、申し訳ないが彼女の訃報は遠い国で亡くなった人のニュースに似ている。年代が違う、生活のリズムが違う、世話になったという記憶もほとんどない。私と彼女との関係において、共通の思い出話も本来は一つも無いはずだった。

そういった前提から考えると、早起きして身なりを整え、呼ばれもしないのに親族に紛れて霊柩車を見送る私の行動は、いささか理解しがたいものがあるだろう。それを証拠に、クローゼットの奥から喪服を引っ張り出す背中を、妻と娘は怪訝そうな顔をして眺めていた。

手を合わせて見送る心境は、写真に例えるならセピア色に近いのだが、〝哀愁〟と言ってしまえば美しすぎる。そこには、少しばかり私を不穏にさせるものがあった。

彼女ひとりの死は、この先の自分の暮らしに具体的な影響を及ぼすことはないだろう。それなのに、彼女を喪したことが、ひとりの人間が亡くなったこと以上の気味の悪い喪失感をもって私をうろたえさせるのだ。

それもこれも、私の隣で天を仰きながら必死に涙をこらえている民生委員の突拍子もない企てから始まった。あの日、民生委員に相談さえしなければ、私は住み慣れたまちで市役所職員として、無難で平穏な日々を過ごしていたにちがいない。

一人暮らしをする彼女宅から、話し声が聞こえ始めたのは、たしか昨年の梅雨の頃。雨はほとんど降らず、異様に湿度だけが高い六月だった。

二十三時過ぎ、書斎の椅子に腰かけて窓を開けた。この時間ともなれば湿った風でも、ある程度の心地良さが感じられる。読みかけの本を開いて、少しずつ物語の中へ入ってゆこうとした時、隣家の二階にある小窓から話し声が聞こえてきた。

「そんなとこに突っ立って、いつ帰って来たんですか。驚かせんといてください。もう遅い時間ですから、先にお風呂入ってしもてください」

「……」

「あんたもこんな遅くまでどこ行ってたん。明日学校あるんやろ」

「……」

「ちょっと、テレビついたままやんかあ」

「……」

はて、一人暮らしのはずだが。

はじめの頃は、娘さんか誰かが帰省しているのだろうと大して気に留めていなかった。しかし、それは毎晩続き、同じ時刻に、同じセリフが繰り返される。隣に住む彼女だけがいつも話しかけているが、一度だって返答の声は聞こえていない。隣家の二階には居ないはずの誰かが居て、彼女はいつも、それに驚かされている。

（認知症ってやつか？）

悪気があってのことではないと察しつつも、時間が時間だけに、寝つくかどうかという晩には、「またか……」とげんなりさせられる。そんな時は、妙に粘着質のある声に聞こえて、明日こそひとこと言ってやろうなどと思うのだった。それでも朝の出勤時に、腰をさすり背伸びしながら洗濯物を引っかける彼女を見ていると、まあ次にするかと、怒りを収めてしまう。

「昔はねえ、物干し竿一本じゃ足りんかったんよ」

「……はあ、そうですか」

私に話しかけているのか独り言かの判別すらつかない。まあ、とにかく。暮らしていれば、ささいな幸不幸は付きもので、これくらいのご迷惑をこうむったくらいが、かえって大きな災いもなくやっていけそうな気さえしてくる。

しかし、そのような小さな不満でさえも放置することを許さない、解決をめざす態度をヨシとする向きが現代の空気感というものだろう。

「毎晩毎晩あの調子で、あの子も気が散って仕方ないって怒ってるわ。それにあの耳につく神経質な声でしょう。どうにかしてもらってよ」

「窓を開けなきゃいいじゃないか」

「あなた今月の電気代知ってる？　窓を開ければ涼しい日だってあるんだから。何もこっちばかりが我慢することないでしょう」

「朝出かける時は、ちゃんと挨拶もして、いつもと変わらないんだ」

「夜の話をしてるの。何も怒鳴り込めって言ってないんだから。直接言えないなら、地域の人か誰かに相談すればいいじゃない」

「地域の人って言ってもなあ」

「だったら福祉課に聞いたらどうなの。同じ市役所なんだから」

自分で言うのもなんだが、私は結構丸め込まれてしまう。本音を言えば、受験生の娘にも、点数を稼ぐための勉強よりも、こういった不満を寛容に受けとめる態度を学んでほしいのだが、そんな説教を垂れたところで冗談にもならない。逆に、大ごとにしたくないだけだとお叱りを受けるのがオチだ。

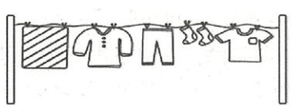
とはいえ、福祉課でプライベートな相談をするのも気が引けるし、地域で相談に乗ってもらえる人を探すしかない。そこで思い当たったのが、家の斜め向かいに住んでいた松田民生委員だ。

私は、隣人の奇妙な独り言も、そのうちなくなるだろうと甘く考えていたところもあり、相談に対する理想的な返答といえば、「個人情報にうるさいご時世なので、他人様の暮らしには立ち入れない」というものだった。

隣人の独り言は解決しなくても、「地域の人に相談した」という事実は残る。家族にも説明がつくというものだ。

しかし、私の勝手都合な考えは、もろくも打ち砕かれた。困ったことに松田さんはかなり熱心な民生委員で、しかも認知症に関する研修会に参加したばかりだったらしく、もう自信たっぷりに、困りごとの解決に向けた作戦を披露してくれた。

それは、私にとって、実にありえない作戦だった。



※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

バックナンバーはこちらから↓

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

地域共生社会を考える若者のために夏の特別講座

いつのまにやら〇〇〇〇

20年先を見据えて、ただの顔見知りで終わらせずに、気にかけ合う関係へ、さらには手を差し伸べ合える関係へと関係性を広げ、深めていくことが必要です。

自分たちが暮らす「甲賀市」の地域共生社会を対話を通じてともに考え、その実現に向けて緩やかに動き出せる若者を一人でも多く育むために、本市の40歳未満の若者向けに、7月25日から毎週金曜日の夜、市役所別館にて全6回の講座を開催しています。（法人連携　シナジーリンク共催）

やってみてはじめて生まれる価値に着目し、参加者28名のそれぞれの「いつのまにやら　〇〇〇〇」を発見する夏の特別講座です。「若者にこのメッセージは届くか！」熱い金曜の夜が続くなか、前半3回の内容を報告します。

本号の内容
・いつのまにやら〇〇〇〇
若者講座特集1
・重層物語スィートメモリーズ

▲講座の終わりには毎回記念撮影、上は参加者が最多であった2回目の様子(R7.8.2)

第1回 コミュニティコーピング体験会 7/25

▲コミュニティコーピング体験会を通じた初回の交流の様子(R7.7.25)

大学生、会社員、学校の先生、福祉の仕事に就いている人、住まいは甲賀市じゃなけど甲賀市に愛着がある人など、みんなが「はじめまして」の関係。

司会は、メンターの山本尚路さんが担当してくれます。大切なことは、「いつのまにやら思考」（図1）。自分のペースでゆっくり行こうね、というもの。「思いの共有のための「ワカモノ撮影隊」による写真のシェア、SNSの活用、もちろんルールの確認も忘れない」等、柔らかさのなかにも丁寧な運営に職員たちが教えられ、支えられながらスタートしました。

「超高齢社会における孤立を防ぐ　コミュニティコーピング体験会」では、ボードゲームで盛り上がったあとの意見交換。お互い初回にしてすっかり打ち解けた様子の受講生たちでした。

メンターとは、メンバーの成長をサポートするもの

図1

いつのまにやら思考のコツ

●対話を意識していきましょう
特別講座では、仲間の意見を大切にしましょう。同時に自分の意見も大切に。 多様な価値観や意見を受け入れながら、自分の中の“大切”を育てていきましょう。

●変化を楽しむ
各自、いろんな想いを持ってこの特別講座に参加しています。 6回の講座を通じて、変わっていく自分や仲間の姿を楽しんでみてください。

●なんども立ち止まろう
いつのまにやら思考の最大のポイントは、急がないこと。 なにか違和感を感じたら、立ち止まったり、仲間に相談したりしながらまた進んでみましょう。

あなたの「いつのまにやら〇〇〇〇」が見つかりますように。

第2回 笑察カフェ 8/1

▲3人のメンター

▲差し入れ
サンドイッチ

◀司会運営担当
山本尚路さん

「仲間のことをもう少し知りたいな」の思いをお手伝いする今回の手法として、「笑察カフェ」を用いました。

自分の行動を振り返り、自身の価値観に気づき、成長するのが省察。

今回はグループのなかで、「私のオシ（推し）」を紹介する対話でおしゃべりしてもらいました。「私のオシは〇〇」を具体的に話す人、聞く人、そして「詳しく教えあう」短い時間の中で、笑いながら仲間を知り合う時間となりました。「省察」の〝省〟を〝笑〟と充てています。

第3回 講義「今こそ若者の力を」 8/8

▲突然のグラレコ
提案の岩崎先生

▲差し入れクッキー

四日市大学名誉教授の岩崎恭典先生を講師に「地域での実践報告～今こそ若者の力を～」というタイトルでご講義をいただきました。

2つのセッションに分け、データに基づき、「これからは、負担を分担していかないといけない時代」「一人ひとりが意識的に行動をしていかないといけないという『主語』をつけることが重要だ」との講義内容でした。

岩崎先生の横では、3人の若手メンターがグラレコ（※）に挑戦！そのおかげもあり、場も和み、やや難しめの講義内容がスッと入ってくるものでした。

受講者が地域で活動する時のイメージが掴めたのではないかと思います。

▲グラレコに奮闘する3人のメンター

※グラフィックレコード(グラレコ)とはプレゼン内容を絵や図のグラフィックにしてわかりやすくえ伝える手法

差し入れという形での参加・応援

毎回、有志からの差し入れが届きますが、3回目に“おにぎり”を差し入れいただいたエリカさんからのメッセージ(抜粋)を紹介します。

本日お持ちしたのは、「タッチデランチ」の定番メニュー「麹たっぷり炊き込みご飯おにぎり」です。
今、甲賀市に子ども支援や高齢者支援はたくさんありますが若者への支援や活動の場は驚くほど少ないと私はずっとそのことを疑問に感じていました。
そんな中、山本さんのインスタグラムでの活動を知り、深く感動しました。「ぜひ応援させていただきたい」そんな思いで少しでもおなかの足しになればと思い、こころをこめておにぎりを作りました。
私自身、若いころは一生懸命働いても、どこか報われないような感覚がありました。それは、きっとこうした集える場所がなかったからだと思います。
これからの甲賀市はどの世代も置いてきぼりにならないまちづくりが大切になって来ると思います。
このような機会をいただけたことに感謝します。

上記記事は、3名の若手メンター（山本君、ゆうきちゃん、キョロちゃん）からいただいた情報から編集しました。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ　2

今、私は隣の家にいて、薄暗くて狭い二階の廊下で身を潜め、静かにその時を待っている。毎晩声が漏れ聞こえてきた小窓は、私のすぐ頭の上にある。もうすぐ23時。嫌な汗がひとすじ背中をつたう。携帯の光が漏れぬように手でかばうようにして時間を確かめる。

（一人暮らしの高齢者を狙った強盗犯はこんな気分なのだろうか）

ずいぶんと物騒なことを考えている。

それにしても、なぜこうなった？　回避することはそんなに難しいことではなかったはずだ。

我ながら理解に苦しむところだが、私には、松田民生委員の考えた計画を、「バカバカしい」と葬り去ることがどうしてもできなかったのだ。

【お悩み相談解決プラン　～隣人愛2025～】

▼立案者、松田寿雄（民生委員二期目）

▼相談者、北島丈志くん

▼相談の中身

相談者の隣家に住む柊透子さんは、毎晩23時になると幻覚症状が現れ、数年前に他界したはずの夫に対して大声で話しかけるらしい。そのようなことは一年以上前から始まり、北島家は柊さんの声に悩まされ続けている。

▼松田的解説

夜間に出現する幻覚症状から、柊さんはレビー小体型認知症と考えられる。その場合、「そこには誰もいませんよ」などと幻覚を否定するような態度は早計というものだろう。一層のこと、透子さんの目に映るもの全てを肯定し、大いに幻覚症状に寄り添おうではないか。

▼プランの内容

23時前に柊邸に忍び込み、北島くんが現場となる二階の廊下にて待機。亡くなったご主人に成り代わって、柊さんの呼びかけに応え、対話することで彼女の積年の想いを果たす機会を演出する。

松田は一階のダイニングにて状況を見守り必要な指示を出す。また、自治会長の大村氏には音響担当としてご参画いただき、懐かしのナンバーでクライマックスを迎える。

▼寿雄のワンポイント

幸運なことに、在りし日のご主人と北島くんはとてもよく似ている。もう少し眉が太ければ瓜二つと言ってもいい。そこで、眉を太くする化粧を施せば、このプランは必ず成功するであろう。

「どうや北島君、なかなかええやろ？」

「これは、いけませんね」

「えっ、なんでや、どのあたりが気に入らんのや」

「全部です。まず不法侵入になりますよ。それに、とにかく決めつけがものすごいです」

「それやったら、眉の太さを」

「違います。そういうのじゃないです。むしろそこはマシなくらいです」

松田さんから初めてプランを見せられた時は、もはやこの計画が実現することはあり得ないだろうと、逆に安堵したくらいだった。しかし、私は今、眉を太くして、隣家宅二階で中腰になっている。想定外があったとすれば、松田さんが対話のできる人だったことだろう。まったくの独りよがりで、突っ走るタイプだと思っていたがそうではなかった。我が子ほどに年の離れた若輩者の、しかも福祉分野に明るくもない素人同然の私の意見に耳を傾けてくれるのだ。

ただ対話といっても、〝多様性の尊重〟と表現するような滑らかな調子はなく、かなり無骨な感はあったし、易々と相手の意見を聞き従わない往生際の悪さもあった。

それでも、相手を論破することを目的するような薄っぺらいものではなかったのが救いだろう。とにかく、松田さんと私は、割と真剣に話し合いを重ね、紆余曲折を経て、概ね3つの修正点にまで絞り込むことができたのだった。

①柊さん本人とご家族に対して、プランの内容を説明し、家にお邪魔することを含めてしっかりと同意を得ること。

②勝手な診断をするのではなく、福祉・医療の公的機関に相談すること。

③プライバシーを守ること。例えば、勝手に自治会長が音響担当として加わるようなマネは厳に慎むこと。

しっかりと話し込んだ分だけ、その後の松田民生委員の動きは迷いなく淀みなく行動を伴い、プランの実現に向けて前へ前へと進んでいった。

まず一つ目の本人と家族への説明及び同意については、松田さんが柊さん宅を訪問し、実際にあのプランを本人に見てもらって快諾を得たと話していた。

「柊さんは理解が早いわ。ほんまに勘がええ人やで」

松田さんはそう言って喜んでいた。

理解が早くて勘の鋭い柊さんが、松田プラン上では〝認知症高齢者〟となっている。この大いなる矛盾を、なぜあの人はスルーできるのだろう。さらに言えば、一層のこと、わけのわからぬプランなんぞは横に置いて、そのままの相談内容を、つまり23時の話し声について聞いてくれればよいではないか。

しかし私は、かなり疲れがきていたこともあって、もはや松田さんに突っ込みを入れる元気がなかったのだ。それでも県外で暮らす娘さんへの説明だけは、抜かりなく丁寧にやっておきたいポイントだった。とにかくこれ以上の近隣トラブルは御免だ。

松田さんに無理をお願いして、私の目の前で、娘に連絡してもらったのだ。松田さんはいつもの調子で、自信たっぷりにプランを説明していたが、難航している様子が伝わってくる。まあ当然だろうとしばらくはだまって聞いていたが、限界がきた。

「北島くんにはメイクを施しますのや。そやかて紅は引きませんよ。眉をちょっとばかし」と、彼が発した瞬間、私は携帯を奪い取っていた。

改めて事の始まりから説明しなおし、〝申し訳ございませんが〟と前置きをしてから、松田プランを驚くほど饒舌に代弁していたのだ。

「娘さんからもオッケーをもらいましたよ」

電話を切って、私は誇らしげに松田さんにそう言った。

人気のない団地の片隅で、私たちはハイタッチをした。

バックナンバーはこちらから→

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・いつのまにやら〇〇〇〇　若者講座特集2
・重層物語　スイートメモリーズ3

いつのまにやら共生（ともいき）メンバー

ともに創り出した？いやいや自然発生？　居心地の良い場所

甲賀市の地域共生社会の実現を考え、緩やかに動き出せる若者を育むことを目指して、7/25～8/29（毎週金曜日19：00～21：00）までの全６回の若者講座を開催しました。

運営スタッフが大切にしたことは一貫して「対話」でした。回を重ねるごとに、今夜話す人との初めての対話であっても、気分の良い場所をお互いに作ろうとしてくれました。

６回の講義と対話のなかで「自分に何ができるかな」「自分だったらどうするかな」を考え、隣にいる仲間と分かち合う様子は、いつのまにやら優しい景色に変わっていきました。

このあいまいで可能性のある「いつのまにやら〇〇〇〇」を生み出すには、完璧じゃなくても良い、失敗しても良いから挑戦しようとする若者を応援できる土壌づくりであると、認識を共有しました。参加受講者、運営スタッフ、差し入れなどの応援団、覗きに来てくださった皆さんも「いつのまにやらメンバー」です。前号に続き、若者支援特集２としてまじめな学び、優しい笑顔を掲載しました。今後の展開が楽しみです。

▲最終回の晴れやかな集合写真

▼３人のスタッフと中井さんからのラストメッセージ

中井さん

キョロちゃん

ゆうきちゃん

山本君が見た風景はこちら◀

第６回（最終回）　やってみたからこそ　見えた景色　8/29

ラストの講師は、運営スタッフが日頃の地域活動についてトークショー形式で発表しました。かたひじはらない、ゆるっとした雰囲気の中で、「始めは上手くいかなかったり、くじけたりすることがあっても、続けていくこと、やってみることが大切」と話してくれました。

トークショー後は、Last Dialogue～みらいのはなし～と題し、自分の叶えたいことを大きなことから小さなことまで、仲間と話す最後の対話でした。

エンドロールでは、６回の講座を振り返り、素敵な出会いと各々の成長を確認しあいました。

▲夕陽も講座を応援

受講者の声

私はもともと場面緘黙症があり、今でも深く考えると黙ってしまう癖があるんだけど、この講座は優しいメンバーがそれをサポートしてくれて、話せるってなって人には笑顔を出せるくらいに話せました。
日々生き方悩みがグルグルしていて、忙しい中でも講座に参加した自分にも仲間にも拍手。この講座で会えた仲間は応援団。出会えたみんなが大好きです。いい未来へのお守り講座になったと思います。貴重な機会、経験を増やすきっかけをくださりありがとうございました。

第４回　できることから、やってみる　8/15

▲かふかの家
堺副施設長（左）
とここのっす園
田中理事長

前半は講義形式で社会福祉法人 甲賀学園 鹿深の家の堺副施設長のお話でした。

堺さんは冒頭から「当たり前のことを言いますが、できないことは、できないんです。」若い、やる気がある、夢がある…！だからと言って、闇雲に手当たり次第「できそうなこと」をすればいいわけではない。大切なのは、明確な目的・目標を設定することで、成功のイメージが持てるんですよ！と話されました。

堺さんは、「荒れたホームの立て直し」を事例としてお話くださり、人の一番深い所にある大切なものと向き合い続けた自身の体験談は、参加者の心に届いた様子でした。

後半は、田中理事長の進行で「こんな地域に住みたい！作りたい！」を考えるワークショップでした。付箋を用いて、まちの未来を想像し、「自分に何ができるか」を考える参加者の笑顔がとても印象的でした。

第５回　私を生かして、地域を活かす　8/22

▲やさしいまちづくり総合研究所　前神有里さん

労働者協同組合のお話は、参加者の若者も初めて聞く「新しい働き方」でした。

地域の課題解決や多様な働き方の実現を目指しながら、組合員の出資に基づく事業運営、出資金に関わらない組合員の平等な議決権というのは、「地域共生社会」の実現に向けての大切なキーワードでした。

そして、「ゆるふわ」（ゆるい・ふわっと）という考え方。いろいろなものが許され、包摂できる寛容性と、まだないもの、言葉にできないものをみんなで探索して考えていく可能性のことです。

これはまさに「いつのまにやら」思考にぴったりの内容で、これからの人口減少時代を生きていくためのポイントでした。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

上記の記事は、3人のメンター（山本さん、キョロちゃん、ゆうきちゃん）のSNS投稿を一部引用し、使用しております。

重層物語
スイートメモリーズ3

「サッとかけ湯をしてから勢いよくぬるま湯に浸かり、大きく息を吐いた。
(あの時、どうしてハイタッチをしたんだろう)
笑ってしまうくらいに松田さんのペースに巻き込まれている。お隣の娘さんをうまく説得できたことが嬉しかったのか、松田プランの実現をどこかで心待ちにしているのか。そもそも誰があの計画の実行を望んでいるというのだ、あんな無邪気にはしゃいだりして、私はどうかしている。
両手で湯をすくってジャブジャブと顔を洗い、松田さんに引導を渡すなら次がチャンスだと思った。

【勝手な診断をするのではなく、福祉・医療の公的機関に相談すること】

私は仕事の合間に庁舎一階にある福祉課まで足を運んだ。
「いい民生委員さんなんですけどね、突っ走るというか、決めつけちゃうとこがあるんですよ。医者でもないのに診断のマネごとまでしちゃって……ええ大丈夫です、少し強めが丁度いいくらいです。はっきり伝えなきゃダメなんですよ。当日は私も同席しますのでよろしくお願いします」
決して裏切り行為ではない。どちらかといえば素行を正すふるまいだとご理解願いたいくらいだ。ただ、真っすぐな松田さんに比べて、私の小器用な立ち回りが鼻につく。
相談の日、根回しの甲斐もあって、福祉課の担当者はうまくやってくれた。人助けがしたいという松田さんの気持ちをくみ取り、適切なタイミングで相槌を打ち、辛抱強く聞いてくれた。十分すぎるくらいに聞いた後、弓をぎりぎりまで体に引き寄せて、矢を放った。
「よおく分かりますよ。でもね、餅は餅屋ですよ」
「……」
担当した職員は、やや我慢が過ぎたのかもしれない、我が身から離れた矢は正確に的を射る、全くもって正しい指導がご披露された。勝手な診断には危険が伴う、早期の病院受診が原則、夜間に本人を興奮させてどうする、家族をもっと介入させるべきだ、何かあったらどうする……。
「なんかあったらって、何がありますねん」
「あってからでは遅いんですよ。あなたにに責任が取れるのですか?」
「確かにワシは素人やけどなあ、責任があるからやりますねん」
職員は私の方を向いて、〝もう十分でしょう〟と目くばせをしてから、松田さんにほほ笑んだ。一時間以上経っている、終了の合図に違いなかった。
「とにかく娘さんに連絡して、病院にかかりましょう」
腰を上げるよう松田さんを促し、職員に頭を下げながら庁舎を出た。ふと横顔を見ると、怒りではなく哀しい顔をしていた。
(あなたに責任が取れるのですか?)
押しの一手は、本来私からも言いたいくらいのセリフだったはずなのに、どういうわけか聞く側になってみるとたまらないものがあった。そのとき私は心変わりを始めたのかもしれない、よく分からぬ方向へと。
「なあ北島くんよ。追及されるばっかりが責任ちゃうんやで。責任は取らされるもんやない、取るもんやで」
「取ってやりましょうぞ!」
駐車場の片隅で、私たちは肩を叩き合った。

私はもう以前の私ではなかった。隣家から聞こえてくる相変わらずの独り言を聞きながら、眉を太く描く練習を始めた。運悪く現場を妻に見られてしまったが瞬することはない。
「どうだい、亡くなった柊さんのご主人にそっくりだろう」
そう言ってやった。
やがて妻の小言は減り、私にもずいぶん優しくなった。ただ妻は、実家に連絡を取ることが増えているらしかったが、もはや松田プランの実行に向けて迷いはない。最後、三つ目の修正点さえクリアすれば、いよいよ本番だ。

【プライバシーを守ること。例えば、勝手に自治会長が音響担当として加わるようなマネは厳に慎むこと】

ここは妥協できない。今までの修正点とは少し様相も違う。柊さん本人のプライバシーに関わる大事なことだ。これを改めないのなら、松田さんに憧れ続けることはできないだろう。
仕事を早くに切り上げて松田さん宅を訪ね、いつもに増して真剣な面持ちで端的に伝えた。
「公的機関以外、人を巻き込むのはやめましょう。大村自治会長には外れてもらいます」
「それは困る、それはあかんで。チームなんやから」
「音響担当なら、松田さんがやればいいじゃないですか。そもそも音響なんて必要ないでしょう」
予想に反して、松田さんは食い下がった。
「約束を果たさなあかんねん。ワシも大村さんも……」

亡くなった柊さんのご主人と、大村自治会長、それに松田民生委員の三人は元同僚だった。高度経済成長期を駆け抜けた彼らは、みな次男坊で、故郷を離れ、それぞれが家庭を持ち、この新興住宅地に家を構えた。同じ職場、同じ団地、家族構成もほぼ同じ、夏休みにはマイクロバスを貸し切って、三家族みんなで旅行に出かけた。盆も正月も、クリスマスもお花見も集まった。子供らにすれば家が三軒あるようなもので、気に入った家で食事をし風呂に入った。
終わりはあっけなくやってきた。あの日、柊さんが切り出したことを憶えている。
「いつもの旅行やけど、ワシ一人で参加しますわ。なんや嫁さんが家族の時間を大事にしたい言うてな。まあ、子供ももう中学やし、すまんけど……」
特段、三家族のグループには名前がなかった、〝いつもの〟という冠で片付くほど暮らしのなかに溶け込んでいた。そこから妻たちが離れ、順に子供らも離れていった。当時はそれほど悲観することもなく、「男三人で楽しめる旅行があるってもんよ」と傾きかけた景気の中で、何かが崩れゆく予感に抗って、精一杯息巻いてみせた。
柊さんは、亡くなる少し前に意味深な言葉を遺した。
「夏休みがなあ、すぐ過ぎてしまうなあ。ワシら間違ってたんやろか……共同体とは、なんぞや……」

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・「地域福祉研究」取材受け入れ
・複線人生のすゝめ
・重層物語スィートメモリーズ4

学術雑誌「地域福祉研究」取材受け入れ
新たな気づきと発展の機会に

9月16日、17日の2日間にわたり、日本生命済生会が刊行する学術雑誌「地域福祉研究」（下記※1）のなかでの「保健・福祉・医療の現場を訪ねる」といった特集記事に本市が選ばれ取材を受けました。本市の保健、医療、福祉のイチオシの事業を紹介しました。

行政（健康福祉部の各課）の取り組みだけでなく、市を支える医療、福祉団体への取材もあり、現場での悩みや課題に対して、3名の取材陣（下記※2）からご助言をいただき、今後の業務や活動の参考となる機会を得ました。また、地域共生社会推進課が進める「いつのまにやら」の意味づけもご指導いただきました。（下図参照）

▶みなくち診療所において、今村医師より在宅医療推進と地域医療の話を聞いている様子

みなくち診療所を拠点とした在宅医療の展望

『医療』分野からは、令和6年4月より「みなくち診療所」の指定管理を担っている医療法人メディカル甲賀代表の今村陽一医師（甲賀湖南医師会副会長）にお話を伺いました。

取材は、今村医師の熱い言葉から始まりました。冒頭で「私は甲賀で生まれ育ち、これまで地域医療に身を置いてきた。これからの人生も地域に貢献していきたい」「高齢化が進み、医療アクセスが限られる住民を支えるには、行政と一体となった協力体制が必要だ」と語られました。

本市の地域特性として、人口の偏在が大きく、訪問診療や在宅医療では移動時間が長くなること、また開業医の多くが市外在住であるため、緊急時の往診や看取りケアが進みにくいという課題があります。こうした中、同法人ではみなくち診療所において一次救急として、医師会会員および甲賀病院との連携のもと輪番制による休日診療を実施し、さらに在宅医療の推進に向けて夜間の待機体制を整備されています。

また、今村医師からは、行政（市）に対して旧施設の活用やコーディネーターの継続配置などへの期待が示されました。取材の終盤では、取材陣からも在宅ホスピスや看取りの拠点として施設の短期入所などの地域資源を活用する案や、介護小規模・看護小規模に加え医療を包括した「医療小規模多機能型」のモデル構築などの提案が出され、終始和やかな雰囲気の中で取材は締めくくられました。

実効性のある重層的支援体制づくり
人福祉・動物福祉協働会議より

全国的にも先駆的な取り組みを進める「人福祉・動物福祉協働会議」代表の田中ヒロヤ氏にお話を伺いました。同協働会議は、多頭飼育問題を単なる動物の問題としてではなく、その背景にある「人の福祉の問題」として捉え、市民・行政・社会福祉協議会などが分野を超えて連携し、事例の検証から対応、さらには予防的な仕組みづくりまでを一体的に進めている協働体です。

取材陣からは、「多頭飼育のケースを重層的支援へとつなげる優れた実践である」「いわゆる〝ゴミ屋敷〟の予防を目的とした高齢者支援と同様に、重層的支援の必要性を理解する上で最適な取組みだ」と高く評価されました。

▲田中ヒロヤさんのお店で協働会議の活動を聞いている様子

取材陣からの感想

2日間、楽しい取材となりました。市における地域包括ケアや重層的支援体制整備事業などを自分たちの独自の仕組みにしていき、稀有な輝きを発していると思いました。

・黒田研二氏
西九州大学地域福祉学部教授、医師
・牧里毎治氏　関西学院大学名誉教授
・渡辺晴子氏　神戸女子大学教授

※1　学術雑誌「地域福祉研究」
公益財団法人　日本生命済生会の書籍化活動の一つである。地域福祉概念の明確化と理論の深化、地域福祉の向上のために年に1回発行される専門誌。今回の取材が掲載された号は、年明けに発行予定。

※2　取材陣

図

甲賀市発「いつのまにやら」の意味づけがすっきりと

指をくわえて待っていても、地域づくりが始まるというものではない

22の事例を事例集としてまとめる

①継続すること
②変化を面白がること、変化を恐れない
（化学反応、瓢箪から駒・・）
③認め合うこと
＋
④トライ＆エラーを繰り返していること（岩永市長）

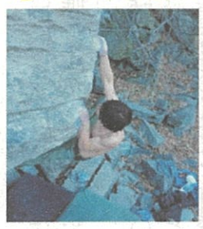
取材により いただいた言葉

⑤チームで取り組み、記録を残して、PDCAサイクルで動かしているのが、いつのまにやらのミソね。（神戸女子大学　渡辺晴子教授）

前号の専門雑誌
地域福祉研究

複線人生のすゝめ
一撃めざして何度もトライ

税務課
かみむらまさゆき
上村正幸さん



これと言って自慢できるものや、夢中になれるものもないままに高校時代は山岳部に入りました。そこでクライミングの一種であるボルダリングにはまって、今年で20年になります。とはいえ、それだけを一途にやっているのではなく寄り道も多いんです。簿記2級を取得し、次は税理士を目指したいし、たまに自転車で走りたくなるし、ジビエにも興味があります。それでも、岩や壁はずっと動かないでそこにあるので、結局、僕自身のよりどころになっている感じです。

クライミングでは、岩壁を登る息を整える孤独や、岩をつかんだ時の筋肉の動き、重力に逆らう躍動感、次の途を探す計算力など、魅力を言えばキリがありません。でもやっぱり「一撃」に憧れます。最初のトライで完全に登り切ることをそう呼ぶのです。「一撃」するために、いつもの見慣れた壁に何度もトライするんです。皆であれこれと共有しながら登ると本当に楽しいですよ。一緒にトライする仲間、募集中です。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ　４

「……共同体とは、なんぞや」
それが、松田民生委員と大村自治会長に宛てた柊さんの遺言だった。
「その意味ってのが、分かりそうで分らんのや」
松田さんは、腕を組みながら神妙な面持ちで言った。
「なるほど、今回のプランにはその謎を解きたいという目論見があるんですね」
私はそう言いつつ、またもや上手く乗せられてしまったと気がついて、少し抵抗して見せようと質問を続けた。
「しかしですよ。個人的な興味関心があるからといって、柊透子さんのプライバシーへの配慮を怠ってよいものではありません。それに、正式な遺言ではなく口約束でしょう」
意地悪がしたいのではない、つまり、松田プランが失敗した時の言い訳を集めているというか、もしもの時に説明に耐えるだけの根拠を用意したいのだ。
「北島君ええか、ワシかて自分の直感が全てやとは思てへん。ただな、大事な局面やとおもたら、やるしかないんや。そういうアンテナは信じたらなあかん。遺言もそや、口約束やったら信用ならんのか、公正証書を見せなあかんか。ワシとあんたの関係において、目の前のワシより、証書一枚をあんたは信用するんか」

信用とは何か……。私は、金融機関の窓口で知り合い同士が、わざわざ身分証明書を取り交わしている場面を浮かべながら、松田さんの言葉を反芻していた。
「今、信用取引の真髄を理解したような気がします」
「そうか、わかってくれるか、北島くん」
「ともに夢を叶えましょう」
松田邸の玄関で私たちはきつく抱き合った。
すると奥の方から、大きなラジカセを右肩に担いだ大村自治会長が、満足げな笑みを浮かべてゆっくり歩み寄ってきた。
「おいおい、お気に入りのナンバーを流してしまいそうだったよ。クライマックスにはまだ早いんじゃないか、お二人さんよう」
大村さんは銀幕のスターを思わせる声で言った。
「これで役者が揃ったというわけだ。さあ、作戦会議といこうじゃないか」

客人として迎えられ、靴を脱いで一歩足を踏み入れた瞬間、かつてこの家が賑やかだった頃の気配が伝わってきた。所狭しと走り回る子どもらの足音、縁側から響く酔っ払いのいびき、台所でささやかれる愚痴と笑い声、彼らが興隆した時代の息づかいが……。
「ああ、あっちの部屋や。仏さんのとこでやろか」
少し後ろから聞こえた松田さんの声にふと我に返った。
作戦会議は仏間で行われた。簡素な仏壇には、六十代半ばくらいの上品な女性の写真が置いてある。
（ああ、そうか。たしか松田さんはお一人暮らしだったな）
男の一人暮らしの割にと言っては失礼だが、室内の掃除は行き届いていて、なにもかもが収まるべき場所にきちんと収まっている。それはどこか無機質な生活を彷彿とさせ、寂寥の感が迫ってくる。家族の写真や作品といった思い出もなく、花やテーブルクロスなどの彩りもない、香りや匂いもしない。期待された役割を従順にこなす無数の道具だけが、使われるその時を静かに伺っている。
ゆえに、亡き奥様の微笑みと線香の残り香が哀しく強調されていた。

「べっぴんさんやろ」
無意識に遺影を見つめていたのだろう、松田さんが声をかけてきた。
「もう五年になるかなあ。おかげさんでワシも大村さんも独居老人やらしてもろてます」
松田さんは、奥さんの写真に向かって、拗ねた子どものように言った。
「いやあ、僕の奥様はまだまだ元気いっぱいだよ。でもねえ、元奥様なんだよ」
大村さんは〝お手上げさ〟とばかりにジェスチャーを交えて言った。
「昔は皆でここに集まってなあ、この机とあっちの居間のこたつをつなげてやな、それでも誰かはみ出して、猫みたいに床でめし食べとったからなあ」
松田さんが、ボールペンをカチッと鳴らして言った。
「今は独りだからねえ、机の上に寝転んで食事ができちゃうんだ、贅沢な話だろう」
大村さんが豪快に笑い飛ばした後、場は静まり返った。

かつては一家四人、三家族で十二人の共同体が賑やかに機能していた。それが家族単位になって、今は、透子さんと、松田さん、大村さんが各々で独り暮らしている。どうやら外に出た子どもらも自らの暮らしに忙しく、あまり実家に帰って来ないらしい。
「大村さんはなあ、すぐ酔っぱらって、縁側で寝転んでやなあ。子どもらが順番にちょっかいかけに行って、子ども相手に本気で怒鳴ってなあ。立ち上がって追い回そうとして、縁側から落っこちやったんやで」
「おいおい勘弁してくれよ。その話は墓まで持っていく約束だろう」
大村さんが豪快に笑い飛ばした後、再び静寂に包まれた。

「……約束といえば、亡くなった柊さんのご主人との約束ですよ。さあ、作戦会議をしましょう」
私は一つ咳ばらいして本題に移した。とはいえ、日時は既に決まっているらしく、もともと計画があってないようなところもあり、確認を要したのは、我々の集合時刻くらいのものだった。
「それでは、十一月十五日の土曜日、夜九時半に柊宅に集合ということで」
そう言って、私が腰を上げようとした時、松田さんが妙なことを言った。
「ワシらの共同体は解体してしもたんや。原因をつくったんは透子さんや」
「よさないか、お悩みの解決に行くんだろう。まるで復讐劇みたいに言うもんじゃない」
会社では大村さんが上司だったのだろう、そういう言い方だった。
「あの、自治会長。クライマックスの曲楽しみにしてますから」
私は、なんとなくお上手を言った。
「急にどうしたんだい。音響は必要ないんじゃなかったのかい、北島くん」
「えっ……いや、まあ」

今夜も、二十三時に同じ台詞が隣家から聞こえてくる。
打ち合わせの歯切れの悪さもあって、身近な暮らしに潜む不気味な世界の入り口に立っているような気がした。ひょっとすると私は、彼らに利用されているのかもしれない、そう勘ぐるくらいに。

そして、十一月十五日の夜がやってきた。

バックナンバーはこちらから↓

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・エリア越境で公助力を磨く
・複線人生のすゝめ
・重層物語スィートメモリーズ5

エリアの越境で公助力を磨く

生活困窮者自立支援全国研究交流大会

11月8日・9日に、「生活困窮者自立支援全国研究交流大会」がびわ湖ホールおよび龍谷大学において開催され、本市からも行政職員、市社会福祉協議会職員等13名が参加しました。

また10月17日には、滋賀県立大学で開催された近江環人（おうみかんじん）「地域再生学」講座に登壇しました。この他にも兵庫県朝来市、神奈川県厚木市から、講義・アドバイザーの依頼を受け、本市の取組みを紹介しながら情報交換を行いました。こうした交流は、本市の取組みを発信するのみならず、事業を振り返りブラッシュアップにつながる機会となりました。

2日間の研究大会では、子ども・若者の困窮や身寄りのない方への支援などをテーマに、有識者や全国の関係者が集まりました。

2日目の分科会では、地域共生社会推進課の中井係長がプレゼンターとして登壇しました。

総括では、滋賀県の大会事務局で元野洲市職員　生水裕美氏の進行のもと、奥田知志氏（Npo法人抱撲　理事長）、原田正樹氏（日本福祉大学　学長）、鏑木奈津子氏（上智大学　准教授）による議論が交わされました。

今大会の要点

①**「孤立」への対応と「越境」の必要性**：生活困窮者支援の核心は「孤立」への対応であり、断らない（関係を切り続けない）姿勢が重要である。今後は、他分野と連携する「横への越境」と、家族機能など制度の手前の領域に踏み込む「手前への越境」が求められる。

②**制度から運動へ**：地域共生社会の実現や生活困窮者支援は、制度導入に留まらず、社会の分断や排除に対抗し、人間社会への信頼を再構築するための「社会運動」としての役割を担うべきである。

③**現場の力の転換**：支援現場は社会の課題をいち早く察知する「レーダー機能」を持つが、その発見を社会全体の仕組みや地域を変える具体的な力へと転換していくプロセスが今後の重要な課題である。

④**AI時代の支援者育成**：今後の支援者育成では、知識の提供はAIに任せ、人間はAIに代替不可能な「人の心がわかる教養」を深めることに注力すべきである。

①

②

③

④

①1日目全体集会の様子②2日目分科会で中井係長登壇の様子③『コーポミルフィーユの住民会議』の推薦者である永田祐先生（前列中央）と共に④大懇親会では奥田知志先生（後列左から2人目）と共に

生活困窮者自立支援全国研究交流大会とは

生活困窮者自立支援制度や包括的支援体制づくりに関わる行政・社会福祉協議会、民間事業所などが、日々の取組みを通して感じる困難ややりがいを共有し、事業や制度を検証しながら支援を前に進めるための場となっています。一般社団法人生活困窮者自立支援全国ネットワークが実施主体となり、厚生労働省の委託事業として今回で12回目の開催。

滋賀県立大学「地域再生学特論」

近江環人（おうみかんじん）

10月17日、滋賀県立大学において、近江環人受講者を対象として、近江環人のメンバーであり本市在住の山本尚路さんと共に、本市の地域共生社会推進課の桑山主査と山口主査が講座を担当しました。

この講座では、山本さんと共に行政と市民が協働して創り上げ、本年7月～8月に実施した若者講座での取組みを中心に話しました。

対話の積み重ねとプロセスの大切さ、グラデーションで混ざり合うことが協働の秘訣であることを伝えながら受講者とディスカッションをしました。

①

②

①講義の様子②県立大学上田洋平先生(後列左端)と近江環人の仲間

複線人生のすゝめ

市民活動推進課
なかじまゆうや

役所魂は役者魂！中嶋裕也さん

少し照れますが、地元で働いてほしいという祖父の期待に応えて市役所に就職しました。今、地域づくりに携わりながら、ミュージカルで学んだことが参考になっています。

小学生の時、『甲賀文化輝き』の第1期生として劇団に入りました。離れていた時期もありましたが、市役所に入ってから再び舞台に立ち、スポットライトを浴びて役を生きました。ミュージカルはみんなでつくるものです。裏方を含めてみんなで。そこが最高に面白い。

幼かった僕は、劇団の中でたくさんの大人たちに許されてきました。暮らしの中にミュージカルという地域と僕をつなぐ居場所があったのです。

まるーむには多くの人が集まってきますが、それだけではもったいない、「人」と「人」との関係性が生まれることが大切だと思います。

そのためなら、僕は表舞台にも立つし、裏方だってこなします。

あえて照れずに言います。僕は、イベントや非日常ではなく、いつもの暮らしの中で生まれる関係づくりをみんなと一緒にやりたい。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ　5

十一月十五日、夜の九時半、柊邸。

松田民生委員、大村自治会長、そして眉を太く描いた私は、透子さんにダイニングへと案内された。ビニール製のクロスがかかった四人掛けのテーブルには、既に一人の男が背を向けて座っており、ノートパソコンを叩いている。

「おや、先客がいらっしゃるようで」

松田さんがどこか遠慮がちに透子さんに尋ねた。

その声に気が付いた男は、首をひねるように振り向き、不機嫌そうな顔をして言った。

「鳥井です。妻に急用ができまして、代わりに僕がこのよく分からない案件に巻き込まれる事になりました」

透子さんの婿にあたる鳥井の皮肉めいた自己紹介に対して、松田さんも大村さんも言い返すどころか共感を示すような態度で席に着いた。

「こんなことに付き合わせちゃって申し訳ないねえ。でもここは一つ、彼のためだと思ってよろしく頼むよ。それじゃあさっそく、これからの段取りを説明させてもらおうじゃないか」

大村さんは私の肩を叩きながら言った。

私は、ある程度の無茶ぶりにはすっかり慣れていたが、それでも確認せずにはいられないことが一つあった。

「あのう、今から実施するプランについてですが、透子さんを交えて説明してもよいものでしょうか？」

丁度、透子さんが台所に立っているタイミングだった。

「かまへんで。もうご存じのことやから、本人さん抜きにやるもんでもないやろ」

当然のことのように松田さんは答えた。

「ですが、二十三時に幻覚症状が現れるとか、ご主人の成り代わりとして私が登場する件について、何というかネタバレが過ぎませんか」

「北島君。それはネタじゃないんだよ、解決へと導くタネなんだよ」

大村さんが自信たっぷりに言った。

「いや、そういうことではなくて。ちゃんとやりましょうよ」

私は諦めずにベストを尽くす覚悟で訴えたが、松田さんも大村さんもどこか上の空で、懐かし気に部屋の様子をぼんやりと眺めている。

「どうも、おまちどうさま」

そう言って、お盆片手に透子さんが瓶ビール二本とグラス四つ、それにおつまみを手際よくテーブルに置いていく。

「お義母さん。申し訳ありませんが、僕は忙しいんです。用事が済んだらすぐ帰りますから」

鳥井は、パタンとノートパソコンを閉じて、そう言った。

白黒はっきりさせる付き合い方には、愛想はないが、かつての自分を思わせるところもあり親しみが湧く。

「明日は日曜日なんだから。今日は泊まって行きなさい」

婿に対してきっぱりと言った透子さんは、普段より若く感じられた。

「いや、でもなあ」

「あにさんよう、つべこべ言わんと。たまには仕事から離れなあきませんで。ほれ」

そう言って、松田さんが鳥井のグラスにビールを注いだ。

「北島君、台所から丸椅子を持ってきてくれないか。透子さんの席がないじゃないか。もちろんグラスも忘れないでくれよ」

すかさず言った大村さんを見て、在りし日の男っぷりや気回しが目に浮かぶようだった。

午後一〇時前。

透子さん、婿の鳥井、松田民生委員、大村自治会長、そして私。縁があるような全くないような五人の宴会が始まった。

考えてみれば不思議なことだらけだった。私の太い眉にも大村さんのどでかいラジカセにも話題が向かないし、毎晩幻覚症状があるらしい透子さんのてきぱきとした身のこなしを疑問視する声も出ない。あんなにノリの悪かった鳥井もいつしか仕事の愚痴をこぼし始めている。

〝すぐ隣にある家の中は、まったくの異世界だ〟

酔えないでいるのは私だけなのか、それとも私一人が酔っているのか。私の持つどうしようもない違和感はとても孤独だった。

異世界だと感じるのは、この隣家に初めて入ったのだから当然かもしれない。分厚い玄関マット、木目調の壁に貼られた家族写真、ガラスケースのセルロイド人形、電話台に置かれた筆記用具とメモ帳、大ぶりの電化製品と家具、ファンヒーターの石油の匂い。ある時期を境に時間が止まっているかのようだ。

夢とも現実ともつかぬ狭間で、目の前の四人をまじまじと見つめる。

（私は、なぜここで、この人たちと酒を飲んでいるのか……）

より一層夢の方へと引きずり込まれそうになる。松田プランなんて最初からなかったんじゃないか。そもそも毎晩幻聴を聞いていたのは私だったのかもしれない。もう何もかもがどうでもよくなったその時。

「北島君、もうすぐ五分前や。スタンバイしてや」

腕時計を見ながら、松田さんが言った。

「えっ、はい。分かりました」

私は、松田さんの指示に慌てて返事をした。

いまさら何を隠すこともないが、私はこっそりとその場を離れ、四つん這いになって薄暗がりの階段を上がっていき、狭い二階の廊下に身を潜めた。毎晩声が聞こえてきた隣家の小窓が、すぐ頭上にある。確かめるようにこちらから我が家をのぞくと、四角いすりガラスに正面を向いた人影が一瞬見えた。反射的に腰を屈める。

考える余裕がない、すぐ二十三時になる。ついさっきまでやかましく聞こえていた一階からの騒ぎ声がピタリと止んでいる。嫌な汗が背中をつたう。携帯の光が漏れぬように手でかばうようにして時間を確かめる。

（時間だ）

階段の電気が点いて、一階から足音が迫ってくる。分かっている、透子さんだろう。透子さん以外はない。ひんやりと冷気が流れる、どこかの窓が開いているのか、金木犀の匂いがする。階段の方に体を向けて中腰で待つ私の背後から、背広姿の男性が音もなく通り過ぎた。そこに階段を上がりきった透子さんがやってきて、その男性と鉢合わせた。

バックナンバーはこちらから↓

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・福祉避難所防災訓練
・避難行動要支援者の外出支援
・複線人生のすゝめ
・重層物語スィートメモリーズ6

もしも、市役所職員が駆けつけられなかったら・・・

福祉避難所防災訓練

「現場主導」法人連携による初の試み

本市では、災害等により福祉避難所を開設する場合、「市職員が現場の調整役として駆けつける」ことを前提としていますが、大きな災害が起こった際に、本当に駆けつけられるのか、その実効性に課題がありました。

そのため、11月23日、避難行動要支援者支援事業を所管する当課と危機管理課との協働により、超大型台風襲来時における行政支援の遅延を想定した福祉避難所開設までの防災訓練を開催しました。訓練の実施においては、社会福祉法人甲賀会をはじめとする8つの市内社会福祉法人や介護事業者、地域住民等の協力を得て、計30名が甲賀荘デイサービスセンター（甲賀町大原中904）に参集しました。

訓練のシナリオはその場での臨機応変な対応や工夫を引き出すために、あえて細かい設定を決めずに、要介護5の高齢者や家族、隣接するグループホームの利用者に参加いただき、訓練を進めました。現場では、情報共有や役割分担の難しさも見られましたが、参加者同士が声を掛け合いながらお互い信頼しあおうとする姿が印象的でした。

訓練後は、避難者や支援者、見学者全員でふりかえりを行い、やってみて見えてきた感想や課題を出し合い、災害に備えた法人同士の連携訓練の意義を確認しました。

①中村荘長(右)が現場で他法人を指揮している様子
②訓練時に用いたわかりやすさに工夫した資料
③甲賀荘に避難する要介護高齢者と家族の様子

▲⑤当事者も交えたふりかえりの様子

▲④自宅へお迎えに行く様子

訓練により見えた課題

1．訓練中、情報が錯綜する中で、状況判断が指揮官（甲賀荘荘長）に集中し補佐役がいなかった。
2．福祉避難所として受け入れ人数を想定していなかった。（受け入れを断ることも大切）
3．応援部隊の役割がわからず「指示待ち」状態になった。
4．訓練に協力いただいた避難者本人と家族が安心して待てる空間づくりが必要だった。（お茶を出すなど）

「映画に行こう」避難行動要支援者の外出支援

11月25日、避難行動要支援者の辻久めぐみさんが、信楽開発センターで開催されたALS（筋萎縮性側索硬化症）をテーマにしたドキュメンタリー映画「杳（はる）かなる」の上映会へ参加されました。その参加にあたり、個別避難計画作成の一環として、支援する専門職が映画会当日に同行し、辻久さんと移動の方法を共有しました。

当課は、避難訓練も想定しながら動線や介助体制の状況を確認し、平時の外出支援を災害時の備えにも活かす取り組みとして進めています。

◀辻久めぐみさん

▲ドキュメンタリー映画「杳（はる）かなる」

◀外出時の移動支援の様子

辻久めぐみさん談

寝たきりで全介助が必要な私は、車いすに移乗する（乗り移る）ということも、お出かけすることも、ただの外出ではなく、非常時の避難行動につながると思っています。

家族だけでなく、ヘルパーさんと一緒に外出準備をすることで、非常時、傍にいてくれる人だけで避難が可能になると思います。

ただの外出、されど外出。寝たきりの私には全てが避難訓練のようなものです。

複線人生のすゝめ

住宅建築課　空家対策室
まつもと　けんた

トゥギャザーしようぜ　松本健太さん

DIYが似合う男である。単に日曜大工が器用だというのではなく、向き合う姿勢そのものがDo It Yourselfなのだ。

申し訳ないが、明確な人生設計があるタイプではない。まず「やりたいこと」があって、その後に暮らしがついてきている。それも「やりたいことは自分でやる」という徹底ぶりだ。資格とか経験はあまり重要なことではない。

「空き家のフロアを張り替えたい」と思ったら、自分でやってみる。YouTubeを見れば素人にもできるし、自分でやるから面白い。

ある時、次のステージがやってきた。一人でやるには限界があるというシンプルな事実。持続性を考えた時に、今のスタイルはどうなのか……。最近になって、「ひとりで完結させない」面白さに気がついた。いろんな人と一緒にやっているうちに、リノベーション物件がパンケーキの店（扇屋）に変わった。その近くに、ラーメン屋があったら面白いと話す。土山宿に店が並び歩いて楽しめる日は、そう遠くない。

▲土山町にある扇屋のパンケーキ

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ　6

二十三時ちょうど、背広姿の男性と階段を上がりきった透子さんが鉢合わせになった。私が息をひそめて待機していた角度からは、男の背中しか見えない。

「そんなとこに突っ立って、いつ帰って来たんですか。驚かせんといてください。もう遅い時間ですから、先にお風呂入ってしもてください」

「ああ、分かってる」

男はそっけなく返事をして、背広を脱ぎ捨て階段を下りていった。すると、男と行き違うように階段を駆け上がってくる者がいる。婿の鳥井か、いや違う。若い女性？　セーラー服を着ている。その娘はジャラジャラしたものがついた鞄をぶらさげている。

「あんたもこんな遅くまでどこ行ってたん。明日学校あるんやろ」

「あーもう、うるさいって」

その娘は、透子さんの顔も見ないで、鬱陶しいとばかりに、向かって左の部屋へ入り扉を勢いよく閉めた。息つく間もなく、向かって右側の部屋からは、急にテレビの音が聞こえてくる。

「ちょっと、テレビついたままやんかあ」

透子さんはそう言って、音のする部屋の扉を開けて中に入っていった。

「……勝手に入ってくんなや」

若い男性の不機嫌そうな声が聞こえた。背広姿の男性の登場から今までの流れは、かなり異様ではあったが、まるでルーティンワークのような退屈さもわずかに帯びていた。

やがてテレビの音は消え、何事もなかったかのように透子さんが部屋から出てきて、静かに扉を閉めた。そして、ほぼ仰向け状態で尻もちをついている私を見下ろして、こう言った。

「あの子は、いっつもテレビつけたまんま寝てしまうのよ」

「そう、でしたか……」

「大村さん、今やでえ」

一階のダイニングから松田さんの声が響く。その聞きなれた声が、まだ現実の中にいることを感じさせる。

《さて、ラストを飾りますのは、このナンバー。失った夢だけが美しく見えるのは何故かしら。甘く切ない思い出はあなたの胸にもあるでしょう。静かな夜に聖子がしっとりと歌い上げます。スウィート・メモリーズ、どうぞお聞きください》

練習のやり過ぎが裏目に出たのだろう。大村さんの曲紹介は緊張で声がうわずっていた。

《イントロが流れ出す》

♪懐かしい痛みだわ　ずっと前に忘れていた……。

私ねえ、こんな風にして家族みんなに声をかけてたんよ。二階の窮屈な廊下をうろうろして。夫も子供らも昼間は外に出てるでしょう。何にも知らない私にでも分かる、外に出て競争させられてるんよ。そうとしか思えへん。弱肉強食、出世、勝ち負け、受験、偏差値。競争が嫌いな私だけが家に残って、家だけはほっとする場所にしたいと思って。

ずるい考えやけど、ご近所付き合いはそこそこにして、家族の時間を大事にしたいと思ったんよ。そやけどねえ、うまくいかへんのよ。みんなほんまに疲れ切っていて、目だけ赤くギラつかさせて、リビングよりも閉じた部屋が休まるんやろねえ。思い描いた一家団欒なんてほんまに夢物語で。

夜の遅い時間に、狭い廊下をうろちょろと、ろくに返事もないし。当時はアホらしいやら情けないやらで。それでもねえ、不思議やけど、今になってみたら懐かしいのよ。キュッと胸が痛くなるんやけど、あの頃が一番懐かしいなあと思うんよ。

夫に似たお隣さん。私みたいな、一つもうまいことでけへんかったもんが、ここで暮らしてたこと、忘れんといてね。

ちょうど曲が流れている間の独白（モノローグ）だった。

見知らぬ町に迷い込んで、偶然入った劇場で舞台を見たような妙な時間だった。すでに私の目の前に透子さんの姿はなく、左右の扉は固く閉じられ、人の気配が完全に消えている。

「北島くん、何をしてるんや。もう帰らせてもらうでえ」

松田さんが私を呼んでいる。両手で頬を二回叩いて立ち上がり、一歩一歩階段を下りる、手すりの感触がひんやりとする。

「今、誰かお風呂に入ってますか？」

階段を下り切ったところで、私は松田さんに聞いた。

「風呂？　何や北島くん、柊さんちで入って帰るんか」

「いや僕ではなくて、背広姿の男性が二階から下りてきたと思うのですが……」

「何やて、背広姿？ ああそうか、婿さんのことか？」

そう言って松田さんが指さした先には、酔いつぶれた鳥井がコタツで寝転んでいた。

「それよりも北島くん。ナイスなナンバーだっただろう。透子さんともうまく対話できたんじゃないかな」

ラジカセを担いだ大村さんが得意げに言った。

「……対話。いえ、独白というか。言葉が出なかったというか」

「そうだったのかい。まあ本番は誰でも緊張するものだよ。しかし、透子さんは満足そうにしてるじゃないか。それで十分だ」

「あの、女子高生があがってきたんですよ。若い男性も部屋でテレビを見ていて、それで、ねえ、透子さん」

「おいおい、何を寝ぼけたこと言ってるんだい。さあ日が変わってしまう。坊やはおねんねの時間だ」

大村さんはまったく取り合わず、さっさと身支度を整え、椅子の背もたれに掛けてあった私の上着を「帰るぞ」とばかりに差し出した。

帰り際、見送りに来た透子さんが、分厚い玄関マットの上に立ち、ポツリと言った。

「一人で幸せになろうなんて。それは無理やからね」

その続きを待ったが、透子さんは「おやすみなさい」と言って、扉を閉めてしまった。その一言は、とても重要なことのように聞こえた。しかし、意味がうまく掴めない。私が理解するにはまだ早い、大人になるまで分らない……。

私は、大人たちの顔をキョロキョロと見上げ、きょとんとした幼児みたいな気持ちになっていた。

それでも、柊家を一歩出た時の外気の冷たさは、鮮明に覚えている。ただ、それ以外の何か重要なことについては、うまく答え合わせができなかっただけに過ぎない。

バックナンバーはこちらから↓

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・権利擁護セミナー演劇で伝える
・歳末炊き出し
・重層物語スイートメモリーズ7

市民向け権利擁護セミナー・演劇で伝える

幹太郎一家から学ぶもの

令和7年12月13日、宇川会館にてNPO法人ぱんじー主催（甲賀市、湖南市、ならびに甲賀市社会福祉協議会、湖南市社会福祉協議会の共催）の「市民向け権利擁護セミナー」が約50名の参加のもと開催されました。演劇の力を借りながら、高齢者の権利擁護をみんなで学ぶ機会となりました。

▲認知症の幹太郎が巻き起こす騒動は、ご近所を巻き込み繰り広げられる。「虐待だ」と割って入るお向かいさんと見て見ぬふりのお隣さんの場面

演劇のあらすじ（冒頭）

新たな3人暮らしは、望まない形で始まった。第一志望の大学に合格し、一人暮らしを始めた娘と入れ替わるように、夫の父親（幹太郎）がやってきたのだ。嫁の茜は子育てがひと段落したら、長年の夢であった書道教室を自宅で開くことを心待ちにしていた。その楽しみがあったおかげで、勤め先の上司の小言や、夫の無関心、娘の身勝手にも耐えることができたのだ。それなのに、いよいよという大事な時期に幹太郎の介護が始まったのである。

本企画は、市民向けに権利擁護を考える機運を高めるために、「誰もが権利侵害を受けることなく安心して暮らせる地域づくり」を目指し毎年行われるものです。

今回のセミナーで目玉となったのは、高齢者の権利擁護をテーマとした演劇は去年に引き続き2回目となります。身近に起こりそうな家族の会話、近所とのやり取りを赤裸々に演じる役者は、甲賀市、湖南市の市職員、社協職員たちで、息の合った演技に圧倒されます。

上演後の講義ではNPO法人ぱんじーの桐髙所長より、演劇の事例を通して地域でできる虐待の早期発見や見守りの重要性について解説がありました。

来場者からは、「とてもわかりやすく、自分の親を思い出した」「虐待、権利擁護という難しいテーマだったが、演劇と講義がセットだったので、理解しやすく勉強になった」「登場人物のやり取りを通して本人の思いや周囲の関わり方について考えることができた」と感想を述べられ、見ているものが自分事として考えられる機会になったようです。関西圏域の大学の先生方も駆け付けてくださり、画期的な手法を称賛くださいました。

今後も関係機関が連携し、権利擁護の推進に向けて取り組んでまいります。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあったのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

いつのまにかプラットフォーム

歳末の炊き出し 年の暮れの夕暮れに

2025年12月30日

At dusk at the end of the year 2025

今回で4回目となった「年の暮れの夕暮れに」（歳末の炊き出し）を、令和7年12月30日、さわらび作業所の協力を得てスポットライフいろは（水口町新城）にて、開催することができました。

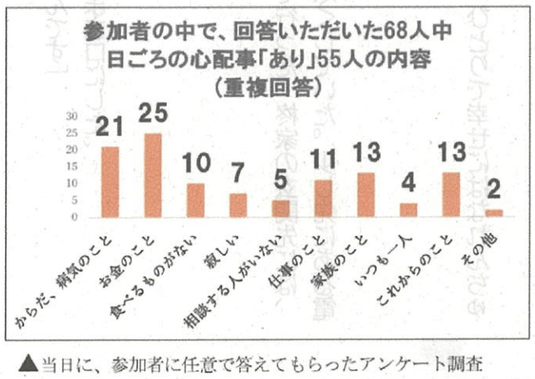
今年は、200人以上の来場者があり、「生活に困窮したり悩みを抱えている人」「障がいのある人」「外国にルーツがある人」「ひとり親家庭に関連する人」といった多様な生きづらさを抱えた方が来られました。

実行委員会形式での呼びかけで集まったスタッフメンバー50名の中には、当課が夏に主催した若者講座に参加した人や、児童養護施設で生活する子どもたち、障がいを持つ人、地域の子どもたちで構成され、多様な主体が参加する炊き出しとなりました。

来場者の中には「今年は良いことなかったと思っていたけど、ここに来れたことが良かった」と話される言葉に、スタッフ一同、温かい気持ちになりました。

今回も多くの企業や関係者の差し入れやご寄付、励ましをいただいて開催できたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。

▲多くの人でにぎわう室内の様子



▲当日に、参加者に任意で答えてもらったアンケート調査

▲こどもたちが企画　お楽しみコーナー

▲具だくさん豚汁と
おむすび

重層物語

スウィート・メモリーズ　7

松田プランを実行した日を境にして、二十三時に聞こえてきた奇妙な声はぴたりと止んだ。まるで、あの訳の分からぬプランが成功したことを示唆するように。ただ、

「一人で幸せになろうなんて、それは無理やからね」

帰り際の透子さんの言葉は薄暗く謎めいたままだった。それこそ誰に向けられたメッセージなのかも判然としない。私に対する警鐘めいた響きも含まれていたし、「……共同体とは、なんぞや」という松田さんらの抱えていた問題を解くヒントのようにも聞こえる。もしくは透子さん自身のささやかな人生に向けられた悔恨のつぶやきだったのか。とにかく、奇妙な声が止んだ後も、もやもやした感覚が二十三時になるとひとりでに甦ってくる。

年が明けてほどなく、透子さんは体調を崩して入院することになった。風邪をきっかけに肺炎をこじらせたのだ。一時的に呼吸不全に陥ったこともあって入院は長引き、それに伴い足腰も気力も徐々に弱まっていった。

結局、透子さんが元気な姿で隣家に帰ってくることはなかった。

奇妙な夜を数時間ともに過ごしたにせよ、深い間柄ではない隣人の死は、まるで異国の地で起こった飛行機事故のように感じられた。

「遅かれ早かれ、隣家からの声は止んだということか……」、私は声に出さずに言った。

「ひとつも器用にでけへんかった人間が、ここにおったこと、忘れんといてね」

ふと、あの夜の言葉を思い出した。まるで脳内に埋め込まれていたアラームが「今だ」とばかりに作動したかのように。確かにそう、透子さんの死は遠い国のニュースではなく隣人の話だ。

透子さんには二度と会えない。あの夜に隣家で体験した幾つかの不可解な出来事について、質問することのできる唯一の相手を、私は永遠に失ってしまったことになる。

「透子さんに聞かなくては」と仕事の合間に思ったことは何度かあったが、私は日々のあれこれを優先させて機会を逃してきた。おおらかではなく無責任という意味合いで、どうしようもなく呑気な人間に思えてならなかった。

休日の午前十時。団地内にクラクションが鳴り響き、半年ぶりに帰ってきた無言の家主を乗せて、静かに霊柩車は出発した。

手を合わせ、透子さんを見送る私は、気味の悪い喪失感に襲われていた。

「これでよかったのでしょうか」とあいまいな問いを横にいる松田さんに投げかけた。

「どうやろなあ」と松田さんもあいまいに返事をした。

「松田さんの求めていた答えは見つかったのですか」と、少し具体的に聞いた。

「そやなあ、すっきり解決とはいかへんけどなあ。後悔はしてへん」

松田さんは何かしらの解答を得て、しかも後悔していない。一方の私は、モヤモヤをしょい込んで、透子さんに対する後ろめたさのようなものまで感じている。

「では、共同体とは何だったのでしょう」

ひとり釈然としない私は、意地悪くもストレートに問うた。

「……不思議やなあ、亡くなったのは透子さん一人やのになあ」

松田さんは前方の遠いところを見つめながら言った。その横顔は、話をはぐらかしたようには見えなかった。前方に目を向けると、霊柩車が曲がり角を左に折れて、ちょうどその姿を消した。

「透子さんが亡くなったこと以上の喪失感……正直、少し怖いんです」

上手く言葉で表現することができなかったが、今の心境をそのまま口にした。

「そうやなあ。わしも今もそんな気持ちや」

「より大きな喪失感……」

「わしらは知らんまに失ったんや」

霊柩車の後を追うように、親族らがバタバタと車に乗り込んで行った。柊家の玄関先には、私と松田さんの二人が取り残されて、静まり返った路地に立ち尽くしていた。少し先にある電柱の陰から飛び出し坊やが無表情な笑みを浮かべている。

「寂しなるなあ……」

松田さんはそう言って、農協の帽子を深くかぶった。

「北島くんよ、なんぼ貯金があっても、経歴がご立派でもなあ、ひとりで幸せにはなれんちゅうことや、ひとりでは……」

松田さんは涙を手で拭って、かぶっていた帽子をとり、深く澄んだ昼前の青空を見上げた。そして、顔を天に向けたまましばらく目を閉じていた。やがて、決意したかのように目をゆっくりと開き、「よしっ」と小さく言った。そして、私に優しく微笑みかけ、肩をポンと叩いてその場を去って行った。

「松田さん、あの、また釣りにでも行きましょう、大村さんも誘って」

私は松田さんの背中に向けて、とっさに言った。

松田さんは後ろを振り返ることなく、軽く右手をあげた。

松田プランを取り巻く一連の騒動は、個人的なお悩み相談の域を超えて、広く普遍性を帯びながら私の心を揺さぶった。透子さん、松田さん、大村さんの甘い記憶が私の身体を通り貫ける際に、チクリと何かで刺されたような痛みがある。それは、いつまでも抜けない棘のような疼きだった。

（失われた共同体への追憶）こんな風にまとめることができるのかもしれない。

透子さんを玄関先で見送った一週間後、郵便ポストには、『男三四、世界を釣る２０２６』と書かれた用紙が投函されていた。プランの詳細は後でじっくりと確認することにしよう。

同日の二十三時。いつものように書斎の椅子に腰かけて本のページをめくる。窓を少し開けると冷たい外気といっしょに金木犀の香りが部屋に入ってきた。

（金木犀？　時季外れじゃないか）

不思議に思って透子さんがいなくなった隣家を見ると、うっすらと灯りがともっている。はて、誰もいないはずだが……。

よく見ると隣家の小窓には人影があり、こちらを見つめているようだ。

月明りがその人影を照らす。するとそこに眉毛の太い男が立っていた。

（解体されたものは、つくりなおせばいい）

そう言われた気がした。

私は（ただし一人ではできない）と、心の中で付け加えた。

バックナンバーはこちらから↓

※重層物語の重層支援とは、だれひとり取り残さない地域共生社会をめざして、相談支援・参加支援・まちづくりを一体的に取り組むこと、一人の困りごとが、こぼれ落ちないように支援を重ねることです。それは支援者の価値観を重ねることでもあります。